
~ グラールの危機 ~

シェリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「グラールの危機」

【Nコード】

N9218U

【作者名】

シエリア

【あらすじ】

3年前に起きたSEED襲来^{シート}。4つの種族が、力を合わせ、封印した。それが、過去にもあり、その過去の恐ろしい力が、今グラールを巻き込む！

プロローグ

それは遙か遠いところのお話

母なる太陽と三つの惑星を持つ「グラール太陽系」。

そこに住む「ヒューマン」、「ニューマン」、「ビースト」、「キヤスト」は、外宇宙より飛来した謎の生命体

「SEED」（シード）による襲来を受け、滅亡の危機を迎えた。しかし、4つの種族は心を一つにして戦い、激しい攻防の末をこれを封印した。

それから三年後。

グラールは、SEEDとの攻防の傷跡が、未だ深く刻まれ、資源枯渇が、問題になっていた。

外宇宙への移動を可能する「亜空間航行理論」が、提唱され、再興の道を外宇宙への大規模な移民計画に求めた。

政府・軍・三惑星中の企業は、結束し、「亜空間航行」の実現化へ向けて動き出していた。

「グラールの新しい未来」を願って

だが、そのウラには、過去の者達の罫に嵌ってる事を

誰も知らない

プロローグ（後書き）

久々の新小説です。（おい！

アルラシア・・・完全放置気味です・・・だって、ネタが、出ないのさ

ブラ×ホワは、結構進んでいます。

今回は、ファンタシスターのお話です。

どうぞ、お楽しみ下さい。

1st:翼を抱き少女(前書き)

リトルウィングで繰り広げられるストーリー、スタート!

1st：翼を抱き少女

ここは、レリクス

私は、フリーで任務なんかをやってる。

ああ・・・紹介遅れたわね。

私は、キャストの『ライアル』。

見た目は、人間っぽいが・・・。

あら？あそこに五月蠅い小生意気な少女・・・

ー失礼だよ！

五月蠅い。

「帰りたいよ！ここ、あのレリクスでしょ?!」

「五月蠅いなあ・・・。ここは、安全だ。俺が、何か課題を持って来てやるから待っている!」と言い立ち去る。

「もう……いやっ！うっう………」としゃがみ込む。

「おい！？危ないぞ！逃げろ！」と叫ぶ。

私は、すっかり同じ用兵と話していて、気付かなかった。

その同じ用兵も「危ないから、逃げたほうがいい。」と私に教え立ち去った。

私は、急いで向かう。

「ちょ！待って！」と言い走っていった。

「この！このヤロー！開きなさいよ！」と言い叩いた。

「あら？貴方も閉じこめられた？」と冷静に言う。

キャストは、冷静な機械だ。

でも、最近は、感情豊かな設定を組み込まれてる。

「貴方は？」

「そう。閉じこめられたみたい・・・。」と言う。

つまり、私と一緒に状況

「まさか、この海底レリクスに閉じこめられるなんてね。」と言う。

「訳わかんない・・・。」と言う。

「ああ……。紹介は、まだだったね？あたしは、エミリア・パーシバル。」と言う。

「私は、ライアール。フリーの用兵をしてる者よ。」と言う。

「どっしょつか……。」「と考える。

待ってられない。

私の理論には、合わない

こうなったら……。。

私は、まっすぐ進む。

「何やってる！？もう……。先に行かないでよ！」と向かって行く。

「ちょっと……。ここ沢山のモンスターがいるしー（泣）」とエミリアは、泣きながら銃を撃つ。

「仕方が、ないでしょ……。」「こつてSEE^{シート}Dの影響が、強いよ。・」と剣をモンスターにぶつける。

「あなたは……。フリーの用兵やってるからーいいんじゃないけど
！あたしは、無理やり……。」「

「あつ、ゴキブリ……。」「

「キヤー!?!」と驚く。

「何するのよ……。」「とエミリアは、言う。

「それぐらい、叫べるなら、大丈夫ね。」「と言ひ私は、剣をロツト
と取り替える。

「……。もう……。」「とムスツとする。

「あんたって……。性格悪いとか言われるでしょ?!」

「よく判ったわね。」「と言ひフロツピーを埋め込む。

「自分で認めるな……。」「と言ひエミリアは、ある物を見つける。

「つて……。あれ畏じゃーん……。うう……。ライアル、
あんたに頼むわ。」「と言ひ。

「行き成り……。だから……。ヒューマンは……。」「と言ひ前に

「ああー悪口は、後にしてー」

私は、仕方なしに罫を華麗なアクロバットで、通り抜ける。

そして、

「これね・・・」とポチッと押しフロツピーを取る。

「さすがー用兵！」とエミリアは、言った。

「ふう・・・やってあげたわよ・・・」と私は、エミリアに言う。

「ふえ・・・やっぱ用兵。私は、軍事会社にただ登録してあるだけ・・・それに戦いは、苦手なんだ・・・。それにおっさんだったら・・・こんな可愛い私を働けと扱くのよ？酷くない？！ライアール！」と言う。

「それは、エミリアが、悪いでしょ？仕事は、しなきゃ駄目だ。」
と私は、言う。
キャストとして明確に答えた
ただそれだけ

「いいよ！いいよ！どうせみんなおっさんの味方なんだから！」

「はいはい、御免なさいね」と言う。

「へえ・・・意外とあんなつて、表情変わるんだ・・・」と小さく言う。

「あたしのいう事は、誰も聞いてくれない・・・。ここレリクスって

最近見つかった場所には、何故か原生生物ばかりいるでしょ？何かあるんじゃない？」とエミリアは、言いかける。

「へえ、結構詳しいわね……。フリーでやってきた私の情報と一緒に……。エミリア、あんたとは、気が、あいそう……。」と言うと自然に微笑む。

「信じてくれるの？」

「ええ……。それよりレリクス、ぬけるわよ？もう暫くで奥にけるから……。」

これが、私とエミリアが、リトルウィングに入るキツカケとなるうとは、思ってた……。

私達が、奥に行くと自立起動兵器の部屋だ。
こここの場所は、何か変だ。

「何か、嫌な予感が、する……。」

すると何故か起動兵器が、目覚めた。

まさか、旧文明の名残の兵器が、目覚めるなんて……

「どうするのよ？」

「エミリア、大丈夫……私を信じなさい」

「大丈夫って！？……もう、あんたを信じる……その大丈夫に……。」

起動兵器が、遅いかかる。

「はあ！」と剣を降る。

「気をつけて！銃じゃ、あいつを倒せない」

「解ってるわよ・・・エミリア、援護頼むわよ！」

「うん・・・な」

兵器に寄ってたかつての戦い

パリン！

「・・・・・・・・倒せた」

「はあはあ・・・あたし、生きてる？生きてる・・・・・・・・。凄い・・・倒せちゃったよ・・・あんたを信じてよかった・・・」とエミリアは、言う。

その時エミリアの前に起動兵器が・・・

「えっ？」

「あぶな・・・」

私は、起動兵器にエミリアから守る為出た。

「うう・・・」

私は、ただ壊れていく音を聞いて意識を失った。

「……えっ、起きてよ……起きてつてば……私を置いていかないで……一人にしないで……誰でもいいから……助け
てよ！」

少女の叫びが、神の加護を受ける。

少女に謎の波紋が、上がり……起動兵器までも消滅させた。
まるで、天使のようだった……

『貴方を死なせはしません』

不思議なボイスが、響き渡った。

誰かの声が、する。

確か……私は……海底レリクスでエミリアを庇って……自分
が、壊れたと思う……

《システム、異常なし……プログラムの起動》
そして目覚めた。

「おお、気が付いたのね！ちょっと待ってね。社長さん〜！お客さ
んが、おつきしたよ！社長さんもおつきして」と緑髪の女性が、言
う。

よく見ると機械の耳……同じキャストだ。

「ああ……」と情けない声で男が、答える。

あの男……確か……海底レリクスでエミリアと話してた男だ。社
長……？それにしても情けない社長だ。

そして緑髪の女が、振り向き

「ようこそ！ここは、クラットシックスリトルウィングの事務所へ！貴方、ここに運ばれたのよ。」

「はぁ・・・」と一応いい

「私は、チエルシー！」と言い握手を交わす。

「あっこちらこそ・・・助けて貰って・・・。私は、ライアール。一応フリーの用兵です。」と言う。

「はい、よろしく。礼儀正しくて嬉しいよ。」とチエルシーが、言う。

そして男が来て

「おお、目を覚ましたな。俺は、クラウチ・ミュラーだ。偶々あの海底レリクスを調査してる時に閉じ込められた馬鹿が、いるって聞いて、そいつが、所属不明だっていうからここで引き取ったわけだ、その馬鹿が、お前さんだ。」とクラウチは、言う。

そういえば・・・2人って言ってない。

エミリアは、無事だろうか？あの自立起動兵器のことだ。再起動して、エミリアが、襲われたとしたら・・・

「そういえば・・・もう一人の少女は？」と聞いてみる。

「はぁ？」とクラウチが、言う。

ムカツク奴だ。だが、今は、抑える。

「お前さんに合わせたい奴が、いる。」と言い発信装置を出す。

「はぁ？行きたくないだと？すぐ、来い」と言う。

どうやらあわせたい人物は、拒否してるらしい。

「今のうちにここについて説明するわね」とチエルシーは、言う。

そこからは、聞いたのは、ここは、クラット6にある軍事会社らしくやってることは、ガーディアンズと変わらないらしい。

すると一人歩いてくる。

「おっさん・・・今ほつといてよ・・・あたしが、海底レリクスで大変な目にあつたの知ってるでしょ？」

少女の声・・・これは、エミリア！

「何言ってるんだ！ほらっ！客だ」とクラウチが、言う。

「えっ・・・始めまして・・・って、あんた・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・死んだじゃ・・・」とエミリアは、言う。

私もこれは、奇跡にしか思えない。

起動兵器に引き裂かれた自分が、こつぴんぴんしてるのだから。

「かつてに人を殺すな」とクラウチは、言う。

「つておっさん、なんで教えてくれないのよ？」

そんなエミリアの言葉を無視に

「エミリアとお前は、知り合いだったのか・・・好都合だ。しめしめ」とクラウチが、言う。

「好都合・・・？」とエミリアは、言う。

「お前さん、フリーの用兵だろ？なら、リトルウィングにはいらな
いか？今なら、いるだけマシなパートナー付きだ」

「おっさんにしては、気が、いいわね」とエミリアが、言う。

「何、他人事みたいに……。パートナーは、エミリア、お前だ」と
クラウチは、言う。

「ええ
！」

「どうだ？」

そうね……。きっとこいつ（クラウチ）は、きっと多額の金を要
求する。

何故か、そう思う。エミリアとなら、やれそうだし……。第一にフ
リーより給料が、よさそうだ。

最初は、ガーディアンズに憧れてなった用兵だけど……。聞いてみ
ると……。この服装は、自由らしく、ガーディアンズよりも危険な
ミッションを受けるらしく……。私には、好都合の話だ。

「ええ、やるわ。」と言う。

「よし、それならもうすでにお前さんのマイルームを用意してるん
だ。エミリア！案内しろ」と言う。

「解ったわよ！ライアル、マイルームで待ってるから」と言い去
る。

「ふう……」

「社長さん、厳し過ぎるわよ?」とチエルシーは、言う。

「厳しいのが、決まってるだろ?」と私に言う。

「まあ・・・ね」と呟く。

「お前さんに言っとくが、俺とエミリアは、親子じゃね・・・。エミリアは、俺が、引き取った孤児だ」と言う。

「・・・・・・・・・・」と黙る。

「・・・・・・・・・・おあと、エミリアが、待ってるよ。レディーを待たせたら駄目よ。」とチエルシーが、言う。

「・・・・・・・・・・ああ」と言い去る。

私は、エミリアが、待っているマイルームに向かっていた。途中で、海底レリクスにいたキャスト・・・用兵にあった。彼の名は、バスクと言うらしい。

私と同じくクラウチに誘われたそうだ。

そしてもうひとり・・・エミリアの過去を知ってるという女性・・・クノー

いつか、聞いてみるべきね・・・エミリア彼女の事を・・・

マイルームの前につく。

「遅い!もうちょっと早くきてよね?」とエミリアは、言う。

「あら、御免なさいね。挨拶と施設を見て回ってたら、遅れちゃったのよ」

「まあ、いいか。私、眠いし、手短かに説明するわね」

マイルームは、結構広いわ。

宇宙船とは、思えない施設作りだ。

エミリアに手短かに話された後、眠ってしまった。

「まあ……しょうがないわね……」と言い毛布をかけて上げた。

「ちょっと来て、ナナリー。」と言う。

ナナリー……私のパートナーマシンナリーの名だ。

多分、クラウチが、私のマシンナリーも一緒に連れて来たと思う。

「はい、ご主人」

「そこにいるエミリアっていう子をベットに移してあげて」

そう伝えると小さな体で持ち上げ、ベットに遷す。

「ありがとう。スリープモードにしとくね。」と言い腰側に設置してあるボタンを押す。

「ふう……」

その時

『待つて……ここなら、話せそうだから』

海底レリクスで聞こえた声だ！

「誰？」

するとエミリアの額に不思議な模様が、現われた。

「私は、ミカ。遙か昔、グラールに存在した文明人。いうなれば、旧文明人ですね」

「エミリアは、どうした？」と聞く。

「疲れてるのでしょうか……。大丈夫、目を覚ましますよ」と言う。

「それなら、よかった。」

「今、グラールは、危機に瀕しています。SEEDシードを知っていますよね？」

「ああ……。」「と言う。」

SEED……。この世のものじゃない……。化け物だ。そのせいで、原生生物にも影響を起し、多くの種族も失った。

「それは、私達の時代にもあつたのです。」

「旧文明人の力でSEEDを抑えましたが、肉体にも汚染され、私達ある方法をしたのです」

「……………」

「ヒューマンを作り……。文明を発展した時、肉体を奪う……」

とミカは、言う。

「肉体を………奪う?」

「はい……恐ろしいでしょうが、本当なんです。貴方にもその影響が、あります。」

「……?」

「レリクスで肉体が、滅びた貴方が、何故存在してるのか……」

「夢じゃなかった……」

「はい、自立起動兵器で肉体を滅ぼし、エミリアの声で私のプロゲラムで貴方を治療しているのです。今……でも」

「………」

「旧文明人の野望を打ち砕いて下さい」

「………旧文明人でしょ?ミカも……」

「はい、ですが私達は、滅ぶべき存在だと思っています。」

「………」

「エミリアが、起きますね。話は、いつか……」と言つと途絶えた。

「………。何を見てるのよ?」とエミリアは、言う。

「ミカじゃないのか？」

「あのねー、私は、エ・ミ・リ・ア！間違えないでよ！もう・・・次は、マイシップに行くよ」

「ああ・・・・・・うん」

「来た、来た。今から、マイシップについて説明するね！ここから、任務を受けられるんだ。社員用だから、大事に使ってよね？」とエミリアが、言う。

一方、私は、あの事を話そうか、迷っていた。キャストの自分には、珍しい事だ。

「どうしたの？ライアル。さっきから、変だけど」とエミリアは、言う。

「エミリア・・・貴方に旧文明人の意識が、あるの」と言う。

まあ・・・信じないでしょうけど

「えっ？それなら、気付くわよ。もう・・・あんたとは、海底レリクスで十分」と言うと私の腕を握り

「ねえ？あんたの事をもっと教えてよ？パートナーなんだから！」

エミリアの「パートナー」と言う言葉

私は、彼女は、私を信じる相手だと確信する。

「ええ……、いいわ。よろしく！相棒！」

「うん！」

1st翼を抱き少女（終）

2st: 黒衣の破壊者(前書き)

黒衣の破壊者が、完成しました。
でわ、どうぞぞ！

2st：黒衣の破壊者

私は、今フリーミッションを行ってる。

例によって・・・海底レリクススのプラント回収とは・・・

「ご主人・・・敵、来てますよ？」とナナリーの声で、我に変える。

「そうだったわね・・・。目標・・・2匹」と呟き、ダブルセイバーを握る。

危ない・・・危ない・・・まだ敵は、弱い方だ。

強かったら、なおさら危ない。

「エミリア、ナナリー！行くよ！」と言う。

・・・

「ふう・・・、終わった。」とエミリアは、言う。

何とか海底レリクススをクリアした。

ブルブル・・・

「電話よ？」と言う。

「はい、もしもし・・・はい・・・そうですか？本人は、払ったとか言っていましたか？・・・あ、はい」と言いエミリアは、きる。

話的にどうみても・・・ツケのようだ。

「何の電話だったの？」と私は、言う。

「おっさんのツケの話よ！おっさんが、いない時は、私が、出てるのよ」とはあと溜息をする。

「もお……ライアル。私と来て……」と言う。

私は、エミリアと共にクラウドが、いる場所へと向かう。

そしたら、チエルシーもおっさん（クラウド）の請求書を持っていた。

店的に……（知りたい人は、プレイして……

クラウドを見つけると、何か酔っ払ってる。

どこのまるで駄目なおっさんだ？まあいいわ……

「おっ、来たか。お前達に初ミッションだ。」と言う。

「おっ、来たかじゃないよ?!おっさん、この請求書何?」と突きつける。

「あ……つちい……経費で落とせないのかよ?」と言うマダオ

「まあ、いい。お前ら、発任務だ。このワレリー・ココフという奴を探して欲しい。」と言い写真を出す。

「それ、誰かの?」と私は、言う。

こいつ……まさか自分のじゃないだろうな?

「それは、俺からのだ。」

やっぱり……まじどろにかしてほしい……このマダオが!

「エミリア、ここ酒臭いし……行きましようか?場所は、モトウ

「ブでしょ?」と言っ。

「ああ、そうだ。さすが、用兵だな」とクラウチの言葉を無視してマイシップに向かった。

マイシップからモトブについた。

「おっさんはへんぴな場所って言ってたけど、その割に観光プラント並に船が、多いじゃん」とエミリアは、言っ。

後からデータで貰ったけど・・・

ここは、モトウブのクロウドック地方だ。場所的に観光名称じゃないはずだ。

でも・・・変だ。こんな森に何のようであたんだ?

「こないっぱいのなか、ワレリー という人、探し出せるかなあ?」と言っ。

「そっね・・・。まあ、やりましようか?」と言いピストルを握る。

「ていうか、なんであたしたちがおっさんの貸したものの取り立てをしなきゃならないのよ……経費だけじゃなくて、依頼まで私物化しはじめてるよあのおっさん。誰か、ガツンと言ってくれないかなあ……」

エミリアの呟きに

「エミリアが、言えはいいじゃないですか?それとも、私が、言いますけど?」と言っ。

「ムダムダ。おっさん、あたしのいうことなんか何一つ聞いてくれないもん。あーあ、どうしたらあのおっさんはあたしの話を聞いてくれるようになるんだろ……?」

「とりあえず、任務をクリアして……その後……マダオじゃなかったクラウチに言ったら、どう?」と言う。

「って……マダオって(焦りそんなことであのおっさんが急に態度変えたりすると思う?」

「これから、色々と功績を残せば、貴方の声も聞くとと思うわ。まだ、クラウチは、貴方を甘く見てるだけだから」と言う。

「そうかなあ……? それに、あたしは戦うのとか嫌いだし、調査とかも……クライだしさ」

「それより、ワレリーって人を探さないとまたおっさんがうるさいだろうし……依頼をこなさないと、話すも何も無いよね」

「おい、お前達。こんなところで何しているんだ? 文化保護地区を見に来たって感じじゃなさそうだが……?」

男性の声だ。振り向くと小さい少年が、いる。データを確かめる。
……
……
……
大人? 噂の小ビーストって奴か……
初めて、見たわ。

「あ……私達、探してる人が、いるのよ。貴方、もしかして小ビースト?」と言う。

「ああ、そうだが？」と答える。
「やっぱりね……」

「だめだよトニオ、こつちには人っ子一人居なかったよ。そつちは……あ、二人見つけたんだ」
とまた一人来た。今度は、女だ。

「あの……どちら様ですか？」と私は、言う。

「おつと、そつちや自己紹介がまだだったな。俺は、『トニオ・リマ』……フリーの傭兵だ」

「あたいは『リイナ・リマ』。夫婦で傭兵やってるんだ」

「えっ？夫婦！？」とエミリアは、驚く。

「エミリア……そつちいう人種もあるわよ」と呆れて言う。

「あつ、紹介遅れましたね？私は、ライアール・ブランよ。こちらは、私のパートナーのエミリア・パーシバル。2人供、リトルウィング所属よ。」と言う。

「……ライアール・ブランって……何処かで聞いた名前だな……」とトニオは、呟く。

「いや……気のせいかな」と言い

「とりあえずカーシユ族の村まで行こう。そこに行けば、何か手がかりがあるかもしれないからね」とリイナは、言う。

「カーシュ族……ああ、文明と離れて暮らしてる人々の事か……」と私は、言う。

「ライアール、あんたよく知ってるわね」とエミリアが、言う。

「それに、あんたちゃんと苗字が、あつたんだ」と言う。

失礼な……

「ああ、ご免ご免……」とエミリアは、言う。

そして、森に入る。

森は、生い茂っており、幻想的な場所だ。

暫くすると、目印が見える。

「ホラ、見て！ あれがカーシュ族の目印だよ！」

リイナのお陰で翻訳して貰ってる。

私には、全然解らないけど……

最後の場所と思われる目印につく

「おつ、これも目印だな。リイナ、解読頼む」

「あいよ。うーん、これは」

するとエミリアが

「あ、それ……この先の道のことについてだ……ふーん、なるほどなるほど。よかった、わりと近い場所にあるみたい」

「……読めるの？」

「一応、リイナに読んでもらうとあってる。」

「ほら、ほら！ こっちだよ、早く行こー！」

「……おまえ、とまれ！」

少年の声だ。

敵意が、感じる。守りたいという思いが、伝わる。

「これ以上近づかせはしないぞ！！ 村は、ぼくが守る！！」

「エミリア、武器を持った方が、いいわ」

「ああ……うん」

「ひょっとしてあなた、カーシュ族？ 村で何かがあったってこと

……？」とリイナは、言う。

私も気になる。

とりあえず、彼を落ち着かせる事が、先決だ。

「だとしたら何だッ！！ 許さない、許さないぞ！ 村は、みんなは、ぼくが守るんだ」

私達は、カーシュ族の少年を押さえ込むように攻撃する。

何とか気絶という形で抑えた。本当は、したくなかったけど

「この子がカーシュ族？ あたしたちと同じように見えるけど……？」

エミリアは、言う。

「カーシュ族は、種族じゃないわ。部族ね。」とリイナの代わりに言う。

「最近では文明に触れる機会が増えたみたいだし、話は通じるはずなんだけどね」とリイナは呟く。

「そのわりには、あたしたちをおもいつきり何かと勘違いしているみたいだったけど……どうしよっか、この子」

エミリアが、言う。

「……私とエミリアが、カーシュ族の村に向かうわ。気になるし……残りの2人は、その少年を応急手当をしてくれる？」と言う。

「うん。私も気になっていたんだ」とエミリアは、言う。

「判った。お前達、気をつけてな」と言いトニオは、リイナと一緒に少年を運んだ。

「さあ、行きましょう」

「うん」

私達は、駆け足で向かった。

エミリアと私は、必死に走っていた。

原生物が、物凄く襲い懸かる。

「くう……邪魔よ！SUVウェポン！はあああああああああ
ああー！」と叫ぶ。

すると私の目の前に大きい機械が、現われる。

それに飛び乗り、原生物を蹴散らす。

「ライアル……今のって……？」とエミリアは、呟く。

「SUVウェポン……。キャスト専用技よ。」と呟く。

少し焦げ臭い匂いが、する。

私は、その匂いに目を細める。

「エミリア……私達の予感、あたりかもよ？」と呟き、ダブル
セイバーを強めに握る。

ついに奥までついたけど……面倒な相手が、いる。

ここ、モトウブでしかない原生物で、凶暴なモンスター

バグ・デッカ……アイツの突進をどうにかするしかない……

・

「エミリア、こいつ手ごわい奴だ！後ろから攻めるわ！」

「うん……」

私とエミリアの死闘により、何とか倒せた。

カーシュ族の村につくとたくさんの人間が、いる。

あいつ等が、この火事的首謀者か。

私は、そのデータを作る。

「あっ」とエミリアが、言う。

「エミリア、今見つかるやバイわ」と小声で言う。

「だって……あいつ、ワレリー・ココフじゃない!」と言う。
よく見るといえる。黒服の男と一緒に……
黒服?

うんうん……違うはず……あいつに限って……ありえない!
い!

黒服の男が、言う。

「悲願への道はこれで開かれた。……貴様達にもう用はない。いずこへなりとも、自由に去るがいい」
よくみると赤いカードを持つてる。

「む……? カーシユ族……ではないようだな。貴様達、ここで何をしている」と男は、私達に気付いたようだ。

「それは、こつちの台詞よ! 貴方達は、何をしているの!? カーシユ族じゃないわね」と私は、言う。

「……もしや? ライアール・ブランか!?」と言う。

私は、目を見開く。その時の声が、とても知っている声だったからだ。

「……そうよ」

「くう……はあはあ……。だとしたら、どうする? その脆弱な力で私と刃交えるか? 『消え往く存在』よ」と元通りに冷酷に言う。

私は、彼が、何者かに操られている事に気付く。エミリアは、気付いていない。

「『消え行く存在』ってあんた、何言ってるのよ……?」とエミリアは、言う。

消え行く存在? ……滅びる存在ってこと? まるで、旧文明人が、言いそうな言葉だ。

「自己を理解することもできないか。……すべからず愚かしい存在だな……まあいい……どちらにせよ、貴様達はここで消えるのだ」

と言うと

その男が、飛んだ。私のデータでは、ヒューマンが、そんなに身体能力が、高くないはずだ。

エミリアに剣を向ける。

その時、エミリアからミカが、現われた。
金色のオーラで、剣を受け止める。

『貴方は……! ? もしや……』

ミカは、何か思い出したのだろうか?
男は、去った。

どうして……彼が? あんなに優しくかった彼が……? どうして……

トニオとリイナも追いついてきた。
同時にエミリアも倒れる。

本当は、彼を追いたかった……でも、エミリアが倒れている。

途中まで、追っただけど・・・

「エミリア、大丈夫？」と起す。

「ううう・・・ん」

返事が、ある。よかった・・・まだ命が、ある。

「あっ、おい！ お前ら、待ちやがれ！」とトニオは、言う。

ワレリー・ココフも去ったようだ。

任務・・・どうするだろう・・・

「今の人たち、何か変だったよ。まるで洗脳されているみたいだった」とリイナは、言う。

「ええ・・・。彼らは、無罪です。あの銀髪の男のせい・・・」
と同時に悔しさが、こみ上げる。

「ライアール・ブラン・・・どこかで聞いた名前だと思ったら・・・お前！確か、ナツメ・シュウ代表とここにいたキャスト！」とトニオは、言う。

「そうよ・・・。」と呟き、エミリアを担ぎ、船に乗る。

「何で、お前が、ここに居るのか話してくれないか？」

「いつか・・・話すわ」と呟く。

「そうか・・・、後カーシュ族の少年も頼む！」と呟き、トニオも去る。

すると

「おい、ワレリーを追い！」とクラウチが、叫ぶ。

「五月蠅い……。」と冷酷の声で言う。

「どうした？」

「五月蠅い！ワレリーは、あんたが、捕まえなさい！こっちは、エミリアが、気絶して大変だから！」と叫ぶ。
見えなくてもクラウチは、啞然しているのわかる。

「……あのバカ！ わかった、ワレリーはこっちで追うから、てめえらはとつと戻ってこい！」と言うと切れる。

「ふう……。」と呟く。

クラット6に戻ると

帰還した後、チエルシーに二人を預け、クラウチに呼ばれたから、カフェに来た。

「よう、来たか。先にいっぱい始めさせてもらってるぜ」

「クラウチ社長……また仕事にお酒ですか？」と私は、呆れ、栄養ドリンクを飲む。

「固い事を言うなよ……。」と言う。

だから……まるでだめなおっさんになるのよ……。彼は、どうしてこんな駄目な人間になっただろう……

話を聞くとワレリーは、何も覚えていないらしい。気付いたら、カーシュ族の村だったらしい。

「ヤツとは長い付き合いだ。……嘘は、ついていねえ」とクラウチは、言う。

私は、それを聞きながら、あの青年の事について考えていた。

「まあ、俺としては貸したもんも回収できたし、それ以上、特に言うことはねえよ。足手まといをかかえてた割には、なかなかの仕事っぷりだと思うぜ。ま、これからも頑張ってくれよ」とクラウチは、言いカクテルを飲む。

カフェに出るとエミリアが、いた。

「ちょっと、マイシップに来て欲しいんだ」とエミリアは、言う。なんだろうと思ひ、マイシップに入ると

エミリアは、あの黒服の男について話し出した。

自分が、戦った事に驚いてるみたいだ。

「実際に黒服のヤツはいて、カーシユ族襲撃事件もあつたんだから、全部が全部、夢のわけないし……」

『そうです、夢ではありません』

ミカの声だ

「ようやく、私の存在に気づいてくれたのですね、エミリア」とミカは、言う。

エミリアは、戸惑っている。

「な、何っ？ 頭の中に何か、流れ込んでくる！ これは……！」

「記憶の共有です。私の事は、改めて説明するよりも、こうして伝

えた方が早いと思うので……」とミカは、言う。

旧文明人の復活計画……あんな恐ろしいことを思いついた人物が、恐ろしく思える。

「それじゃあ、あのレリクスでの事も夢なんかじゃなくて、実際のこと？ あんたはあたしの代わりに一度死んじやってる……？」

「……強引な伝達方法ですみません。心の整理がつくまで、私は姿を消します。落ち着いたら、呼んでください」

ミカは、消える。

エミリアは、私を見詰めて

「あんたは、あたしのせいで一度、死んだんだ。あたしがもうちょっと頑張ったり、気を付けたりしてればそんなことはなかったのに……あたし、ほんとわがままなだけの最低なやつじゃん」

「エミリア……気にしなくていいんだよ？ あれは、私の意思で行った行為だ」と言いエミリアを包む。

「で、でも……」

「私は、用兵よ？ 用兵は、人々を守るのが、仕事だ。私は、その思いに惹かれて、用兵になったんだ。貴方を守ったときは、嬉しかったんだ。だから、後悔していない。エミリア、それなら必死に生きて、命を償うんだ。」と言う。

「必死に生きる？」

「死んだ者のぶんまで、生まれた事に感謝するんだ」と言う。

「うん・・・！あのさ……あたし……この仕事は向いてないと思うし、戦いうのも好きじゃない……けど……向いていなくても耐えるから、戦い方とか、そういうの教えてよ」

「たぶん、まだいろいろと迷惑かけちゃうけど……」

「ええ……。エミリアが、そう望むんなら・・・そしてその気持ちがあるなら」

「戦いが苦手なのは、変わらないけど……ただ、心構えだけでも、それだけでも前を向かないと」

こうして私とエミリアの特訓が、始まった。

2st：黒衣の破壊者（終）

3st:造られた『希望』

フリーミッションを終えて、クラット6に戻ってきた。

エミリアは、まだ半信半疑のような状態だ。それもそうだろう……。ね。いきなり自分の中で、精神だけの状態の意思が、自分自身にいらって聞いたらね……

「亜空間装置止めなきゃ……。ね。でも……。どうすればいいのよ……」とエミリアは、言う。

「クラウチに言ったら、どう？まあ……。私は、駄目社長より、ガードイアンズに通報した方が、いいと思うけど……」

「ガードイアンズは、駄目！それに……。……どうせ信じてくれないよ。……まあ、それでも一応あたしたちの上司なんだし、話しておいたほうがいいのかな……」とエミリアは、言う。

「まあとりあえず……。クラウチに言いましょう。駄目元でも……。やらなきゃね」と私は、言う。

でも……。エミリアは、何故ガードイアンズは、駄目って言ってるのだろう？

いつか……。彼女が、話してくれるの待つしかないか……。それと……。あのカーシユ族の事も気になる。

私とエミリアは、リトルウィング事務所に行った。

「チエルシーさん、いますか？」と言うと

「ちょっと待ってネ。今、お客さんのお相手中ヨー」

「客？」

「よお、また会ったな、ライアール」

「エミリア、元気そうでよかった」

あの時のトニオとリイナだった。

彼らもリトルウィングに入社したらしい。

話を聞くとリイナは、元『ローグス』だったらしく、どこも入社出来なかつたらしい。

「そういえば、あのカーシュ族の子は？」とリイナは、言う。

「チエルシーさんが、言うには、彼は、まだ眠っているわ。余程・・・疲れが、溜まっていたのね」と言う。

「それじゃ、また後でな。それと、クラウチなら奥にいたぜ。さつき会ってきたところだからな」

私達が、別れた後、問題のクラウチに向かう。

「クラウチ社長、少しお話が、あるんですが・・・」と私は、言う。

その後は、予想通りに頭逝かれたとしか、思われなかった。まあ・・・
・予想してたけど・・・
同時にミッションも与えられた・・・
インヘルト社からの依頼・・・

「まったく、エミリアにお前をつけたのは失敗だったか？ よりひどくなっているぞ。どういうことだ、ああ？」
完全にクラウチが、怒っている。

「それは、申し訳ありません・・・。」と云う。

「この世に謝つてすむことなんざ、ほとんどねえよ。相応の働きで返せ」

私とエミリアは、トニオとリイナと共にマイシップに向かって、『パルム』に向かった。

インヘルト社社員の案内で、原生生物が、暴れる場所に案内された。社員は、途中私を見たのか、はっとしていた。

「……あーあ、あれでおっさんには、完全に愛想をつかさねちゃっただろうなあ」とエミリアは、言う。

「大丈夫よ。愛想つかれたら、私達を指名しないわよ？エミリア、そう落ち込まないで」と私は、言う。

「どうやって信じてもらえばいいんだろ……」

「……なんだかよくわからねえが、何かミスしたってんなら、仕事とかで取り返せばいいだろ」とトニオは、言う。

「……そうかな？ 頑張つてれば、みんなも、おっさんも信じてくれるようになるのかな……」

「そうよ。少しずつ信用を取り戻そうよ」

「そうそう、元気出していこうぜ。お前達なら、信用なんてすぐに勝ち取れるだろ。元『ガーディアンズ』教官の俺が保証してやるよ」
トニオの言葉にエミリアは、反応する。

「……え？ トニオ、ガーディアンズだったの？」

まるで・・・ガーディアンズに因縁あるみたいだ。

エミリアとガーディアンズ・・・どんな関係が・・・何故嫌うのかしら？

エミリアが、落ち込んでるけど・・・仕事の話になった。

逃げ出した原生生物の中には、アスタークと呼ばれる、SEED事件の際に発生した新種がいたらしい。

SEEDによりそういう原生生物が、生まれる・・・それは、特に凶暴で、危ない。

私達は、アスタークなどの原生生物を退治していく。

「しかし、この警報は何で鳴りやまねえんだ？」

大部分の原生生物を倒したのに・・・警報が、止まらない。

「ああ！ リトルウイングの方ですね！ よかった、お待ちしていたんですよ！」と社員は、言う。

「どうしたのですか？」

「ライアールさん！？何故こんな所に?!ああ・・・インヘルト社も原生生物の鎮圧のために、警備マシナリーを動かしていたのですが、今度はそれが暴走したみたいです。」と言う。

「あの、マシナリーってどんな種類のがあったの？」とエミリアは、言う。

「ええと・・・GRM製のマシナリーです。」と言う。

「もしかして、リーダー的なのがない？」とエミリアは、言う。

「は、はい。最新鋭の『レオル・バディア』が試験稼働しています
が……………」

「やっぱり？ たぶん、そいつの制御装置が壊れている。そこから
飛ぶ混戦命令で、全マシナリーに影響が出ちゃってるんだと思うよ」
とエミリアは、言う。

「な、なるほど！」

「この先は、グラール中の悲願でもある、亜空間発生装置の開発が
行われている場所です。なんとか、鎮圧をお願いしたく……………」

「亜空間発生装置……………？ この下で開発しているの？」

「は、はい。ですから、この施設を放棄するわけにはいかないの
です。マシナリーの鎮圧、お願いできないでしょうか？」

「判ったわ。とりあえずレオル・バディアを止めればいいのよね？
貴方は、制御室で、ある程度のマシナリーを止めてください！」と
私は、言う。

エミリアは、驚いてるみたいね……………。私もいつか話さなきゃね…………。
私の過去を

「ありがとうございます！ レオル・バディアさえ止めれば暴走は止まります。よろしく願います！」と言い

社員は、すんなり受け入れ、制御室に向かった。

私達は、マシナリーを止める為に奥に向かった。

亜空間開発を行っている区画は海の中にあつた。海の中ならば侵入経路も限定されるし、窓から覗き見するという事も出来ない。

「亜空間の研究は、このような場所で行われているのですね」

エミリアの体からミカが姿を表し、あたりを興味深そうに見た。

「それにしても、亜空間開発さえなければ解決なんだし、ここにある機械、全部壊しちゃえば終わりなんじゃない？」

とんでもない事をエミリアは、言い出す。

「止めときなさい・・・エミリア。今は、マシナリーを撤去するのにここも壊したら、リトルウィングの評判がた落ちになるわ・・・それに・・・」と私は、途中言いそうになったが、止める。

「うー・・・わかってるよう」

「うーぐー、問題を目の前にして何も出来ないって、歯がゆいなあ・・・」

と言いエミリアは、亜空間発生装置の機材を見つつ、言う。

まあ・・・ね。私達は、今・・・人類も知らない事を知ってしまったからね。でも、私は・・・この実験を完成してもらいたい・・・何故かしらね・・・

「亜空間自体は、無数に存在するものであり、旧文明人の存在する亜空間『マハガラ』に通じる確率は、限りなくゼロです。そう急がなくても、恐らく大丈夫でしょう」

「え、そうなの？　じゃあ、ほつといてもいいんじゃない……」

まだ余裕があるとミカに知らされて、エミリアは脳天気な安堵しているが、そう思えなかった……マハガラへの扉が開いてしまう確率は限りなく低い。しかし、だからといって旧文明人たちがなんの対策も立てているわけがなかった。

「しかし、『鍵』が揃うと状況は一変してしまうのです」

「鍵……？　多分……私達を確実に者にする為の……する為かしら……。もしかして……あの時の銀髪の青年が、持っていた《レットタブレット》！？」

ミカは、頷く。

「おい、何ゴチャゴチャ言ってるんだ！　急がないと置いていくぞ」
「！」

とトニオは叫ぶ。

「あつ、すみません！　エミリア、行くわよ！」

私達は、とにかくマシナリーを壊していく。
だが、奥は水びたしだ。多分マシナリーが、行ったのだろう……

「どっつするのよー。一端引き返す？」

とエミリアは、言う。

《……海水制御装置約、1、3 m先に確認
頭の中で響く。》

「大丈夫よ。」と私は、言い奥にある制御装置をオフに切り替える。すると海水は、ドンドン凍っていった。

「よく詳しいんだな……お前」とトニオは、言う。

「まあ……前にも数回ね」とトニオにヒソヒソと答えた。

そうして、暴走したマシナリーとまだ残っていた原生生物を討伐しながら、開発区画の奥へと進む鳩美達は、最深部で巨大な空間に出た。

「どうやら、あれがレオル・バディアのようですね」

最深部で暴れていたのは、ここで戦ったマシナリーの中で最も巨大な者だった。丸く平べったい本体を触手のような足が支えている。

「……来やがったぜ。オマエら、油断するなよ!」

《レオル・パディアの弱点：足を集中的に攻撃せよ!》
と響く。

「皆!集中的に1本触手を攻撃して!」と叫び、セイバーからダブ
ルセイバーに持ち帰る。

「う……うん! 怖いけど……けど、逃げたりはしない!」とエミ

リアは、言う。

何とか、レオル・パディアが、止まる。

「がんばったじゃねえか、エミリア。この前とはなんだか気迫が違ったぜ」

「ええ……そ、そう？ あたし、少しは頑張れたかな……？」

「ええ……エミリア、よくやったわ。でも……まだまだね。」と私は、言う。

「うん……そう言ってもらえるとうれしい。けど、正直まだまだなのかな」

「リトルウィングのみなさん。どうもありがとうございました。先ほど、こちらでも全マシナリーの停止を確認しました」

その時、髭を蓄えた老人が現れた。人間は年を重ねると目が淀んでいくものだが、その男は活力が宿っている。

「……もしかして、インヘルト社代表のナツメ・シユウさん？」とエミリアは、言う。

「はい、その通りです。以後、お見知りおきを」

「ご苦勞様だったな……、ライアール」と私に言う。

私は、少し微笑み

「ええ……お怪我が、なくて何よりです。」と答えた。

「亜空間やその研究のことについては、俺はよく知らねえんだが…

…実際どんなことしてんだ？」

「はっきり言ってしまうと、亜空間は旧文明ですでに発見されていたテクノロジーなんですよ。亜空間研究とは、つまるところ旧文明テクノロジーの研究でもあります」

「SEEDの脅威を乗り越えたグラールには、未来を託す子どもたちがたくさんいるのです。その子供達のためにも、今グラールが直面している資源枯渇問題への対処法は、なんとしても見つけなければなりません」

ナツメからは亜空間研究に対する強い信念を感じる。徳の高い人間が強い信念で動けば、とうぜん賛同者も多い。そんな状況で未来への希望とされている亜空間研究を辞めさせるためには、余程のことがなければ不可能だ。

「それでは仕事が済みましたので、私達はこれで。皆さん、会社に戻りましょう」

亜空間研究は今すぐやめさせることは出来ない。しかし、インヘルト社の代表とわずかではあるものの、面識を作ることができたのは、一つの成果であった。

リトルウィング戻ると、すぐさまクラウチに呼び出された。

エミリアはまた怒られるのではないかとビクビクしていたが、仕事を見事成功させたとしてクラウチは彼女を大きく褒めた。

「あたし、褒められちゃった！　ねえ、聞いてる！　褒められちゃったんだよ！？」

「ええ・・・、おめでとう。エミリア」と私は、答える。
でも、心の中では、シズルの事で考えてた。何故・・・彼は、カー
シュ族の村を襲ったのか・・・
エミリアには、いつか・・・いつか明かさないといけないわね・・・
と思いながら、喜ぶエミリアを見つつ思った。

3st:造られた『希望』終

4st：ハッピーバースデー

クラウドとグデ出会ったカーシユ族の少年が目覚めたのは、インヘルト社の一件があった日の翌日だった。

チエルシーに教えてもらった私達は、医務室に向かった。

医務室に行くとカーシユ族の少年は、私とエミリアを見るといきなり「…………お前ツ！」と叫び、攻撃態勢になる。

「大丈夫です。ここは、貴方の襲う人間なんていないわ。」と少年の腕を掴み、普段は見せない笑みを微笑んだ。

「ああ…自己紹介まだだったわね？私は、ライアール・ブラン。そして、私のパートナーのエミリア・パーシバル。」と一先ず私は、そう言い

「ここは、クラット6内にあるリトルウィングの事務所。後で、チエルシーに詳しく教えてもらえるわ。」と言う。

「ああ…貴方の名は？」と改めて言う。

「ユ、ユート……ユート・ユン・ユンカース」

私は、聞きなれない名前だわと思った。もしかしたら…カーシユ族特有の名前かもね

エミリアは、安心したのか

「ねえユート。起きたばかりなんでしょ？ お腹とかすいていたりしない？」

エミリアはユートをカフェへと連れて行く。ユートは初めて食べる味なのか、カフェの名物メニューであるプリンを楽しそうに頬張っていた。成長期の子供らしい食欲で、一抱えはある巨大なプリンを

平らげていた。

私は、そんなユートを見詰めながら、私もこんな時期あったな……
と思い老けた。

「あ、そうだ。いいこと思いついた。ちょっとごめん、ユートとこ
こで待っていて」とエミリアは、言う。

「まあ……いいけど」と曖昧に答える。

暫くするとエミリアは、シヨッピングしてきたのか沢山の袋を持っ
ていた。

そんなエミリアを見た私は、心の中で金遣い悪いなと思った。

大抵は、エミリアのほしいものだったらしいが、中には日頃から世
話になっているチエルシーへの贈り物までもあった。私は、じつと
見詰めていると何か顔に当たるものに気付く。よくみるとそれは、
大きなカクワネのぬいぐるみだった。エミリアは、それを渡した。

「ありがとう……初めてね……人からプレゼントを貰うなんて」と
正直驚いたが、心は少し嬉しかった。

「んー？ エミリア？ ぼくにはないのか？」とユートは、私の持
っているカクワネのぬいぐるみを羨ましそうに見ていた。

私は、そんなユートに変わりに首にかけてあるブレスレットを渡し
た。

「いいのか？」

「ええ……それは、私が小さい頃つけてたものらしいの。でも……
いいのよ。過去は、過去だから」と私は、言う。

「っていいの？あんだ……」とエミリアは、言うので頷く。

「じゃあ、そつちのちつさいのは誰にあげるんだ？」とユートは、机においてある小さな箱を指す。

その時、赤いハザードランプと共に警報が鳴り響いた。館内放送からチエルシーの緊張した声が聞こえてくる。クラッド6のリトルウイング管轄区に武装集団が現れたと言うのだ。

中央ホールから銃声が聞こえてくる。私とユートは、それを防衛する為に向かう。

しかし、敵の様子がおかしかった。エミリアの姿を見つけると、まるでそれが目的であるかのように彼女を取り囲んだのだ。私は、危ないと思い銃を握る。ウィップを持ったニューマンの女が加勢にきた。私は、その女性をみて、あっと思う。私が、フリーの用兵をやるうと思つたキツカケを造つた人物だった。女性は、華麗にウィップを使い、攻撃する。私は、普段ウィップを使った事がないから判らないが、高テクニックだった。

「おう、なんだ喧嘩か？」

侵入者を鎮圧し、戦闘が終わつた頃になつてようやく、クラウチが出てきた。また酒を飲んで昼寝でもしていたのだろう。不愉快だと思つていと女性もそう思つたのか、クラウチに拳をぶつけた。

女性はどうもクラウチと立場が同等か上位に位置するようで、嫌味を含めた小言を言い始めた。

「エミリア、大丈夫？」と腰を抜かしてる彼女を起す。

体はなんともないというエミリアだが、服のポケットをまさぐつて、そこに入れておいたあの箱がないと慌てる。

「あん、なんだこりゃ？ 包装されちゃいるが……ぼろぼろじゃね

えか」

問題の箱は床に落ちていた。クラウチが潰れたそれを拾い上げる。

「なんだあエミリア、これお前のか？」

「う……えっと、それは……おっさんに……」

お前のものかと訪ねられたが、エミリアははっきりと答えようとしない。その様子から、どうやらあの箱の中身はクラウチへのプレゼントが入っているのだろつと私は、思った。

「お前のじゃねえのか？ んじゃ……ゴミか」と捨てようとするクラウチの腕を私は、握る。

「あん？ なんだよ。これ、お前のものなのか？」

「私のものじゃないわ……それは……」と言いかけるが、

「どっちにしてもこんなボロいもの、捨てちまってかまわねえだろ？」と言い私の手を振り解き、ゴミ箱にダイブさせてしまった。

「あ………！」

その光景を見てしまったエミリアの表情から明るさが一気に失われてしまう。

「バカヤローツ……！」

プレゼントを送ろうとしたら、受け取るべきはずの人間がそれを

捨ててしまう。その仕打ちに、エミリアはクラウチを一言罵って走り去ってしまう。

「ちくしょう、なんだってんだ!」

「……みつけた!」

ユートがゴミ箱の中からプレゼントの入った箱を見つける。

「見つけたって……そりゃ俺が今さっき捨てたゴミじゃねえか」とクラウチは、言う。

「クラウチいえ馬鹿で愚かなマダオツ……それ、ゴミじゃないでしょ?」と私は、言う。

そんな私を見たのか目をパチパチさせてる。

「それは……貴方に贈るつもりだったエミリアからのプ・レ・ゼ・ン・トよ」と私は、言う。

クラウチは、してしまった事に気付き、面目なさそうな顔をした。

「……さ、それはそれとして、仕事の話も始めないとね」

これ以上はクラウチ自身が解決する問題だ。エミリアを探すのはユートに任せ、私はニューマンの女性に着いていった。

ニューマンの女性はウルスラ・ローランと名乗った。彼女はクラッド6の責任者であり、リトルウィングの親会社であるスカイクラッド社から来たと言う。クラウチの昼行灯ぶりが目に余る用になったので、直接監督に来たと言うのだ。

「ウルスラ・ローラン……」と私は、呟いた。勿論、本人には、

聞き取れない程のノイズ音だ。
私が、フリーの用兵になろうと思ったきっかけの人に遭えたことを嬉しく思えた。

ウルスラとの対面を終えると、ユートはエミリアの居場所を見つけていた。

しかし、その時にチエルシーがユートにリトルウィングの社員証を渡していた。村に帰らなくても良いのかと尋ねるが、外の世界を見る良い機会だとカーシュ族の少年は、しばらくここに居座るようだった。

私とユートは、エミリアがいるマイシップに来た。エミリアは、マイシップに逃げ込んでいて、かんしゃくを起こしてミカになだめられていた。褒められた直後にあの仕打ちを受けたのだから、その怒りは最もだった。

「……ちょうどお二人も揃っていますし、先程の侵入者について少し、お話があります」

ミカの顔つきは厳しい。侵入者とは別の視線を感じたと言っただ。

「あ、それはぼくも感じたぞ！　すぐくギリギリしたイヤな感じのだ！」

そこでいきなりユートが話に入ってくる。驚いたことに彼はミカ
の存在を知覚することが出来ていた。

「おねーさん、大地神さまみたいだな」
ミチガミ

カーシュ族が信仰している存在だろうか。ユートが言うには、そ

の存在は『レッドタブレット』というものに宿っており、カーシユ族はミラージユブラストを初めとする、さまざま知識を教えてくれるらしい

「レッドタブレットですって……？ その言葉、何処で知ったのですか？」

レッドタブレットという単語にミカが反応した。それは旧文明人が開発した高純度のプログラム記憶媒体だという。そこに記録されていた人格が大地神の正体だった。

カーシユ族の信仰を集めているレッドタブレット。私は、銀色の青年が持っていた赤いカードを思い出す。

心の拠り所を奪われた事実には、ユートはがっくりと肩をおろし、自らの無力を嘆いた。

「……でも、でも！ さつきエミリアがおそわれたとき、大地神さまをそばに感じたんだ！」

ユートの言葉が事実ならば、黒服の男はあの時クラッド6にいたということだ。

「もつと強くないと……大地神さまをとりかえせるくらい強くないと……」

ユートは拳を強く握り締めた。

襲撃事件の翌日、ライアールはエミリアとユートの訓練に付き添っていた。フリーミッションを終り、部屋に戻ろうと思ったがクラウ

チが新たな仕事の連絡が、来た。

まだ、クラウチと不和が解消されていないエミリアは、行きたくない駄々をこね、仕方なくユートと2人で行く事にした。

依頼はインヘルト社からのもので、亜空間発生実験の間の警備だった。これはただの実験ではなく、スポンサーへ誇示という意味も含まれていた。

警備もリトルウイングだけでなく、ガーディアンズや他の民間軍事会社からも人材が派遣されるほどの大規模なものだ。

「シャツチョサン、シャツチョサン！　ワタシ、おっきなケーキが欲しいのヨー！」

仕事の話をしている最中に、チエルシーがケーキがどうのこうのと言ってきた。どうやら、今日はエミリアの誕生日らしい。

チエルシーはサプライズパーティーを企画しているようだった。口外しないように頼んだ後は、ケーキ代金の領収書をクラウチ名義で切って立ち去る。

私は、ユートとエミリアと共に実験が行われるニューデイズのサグラキ保護地区へと行った。

実験はグラール教団の研究施設を借りて行っていた。現地の空気は緊張に包まれており、大きな物事が動いていることを実感せずに入られなかった。

エミリアは実験で発生した亜空間を見て、マハガラに繋がらないかと不安な表情を見せていて、ミカによるとまだ実用には遠いらしい。

これで何も起こらなければ、ただ見守っているだけの仕事だが、さっそくグラール教団の研究施設に原生生物が入り込んだとの知らせがクラウチから入った。

しかし、その時のクラウチの様子は何処がおかしかった。普段ならば「行け」と命令するはずなのに、今回だけは「行ってくれるか？」と頼むような口調だ。

どうやら、その場所は今までと違って危険な場所らしかった。しかし、すぐに駆けつけられるのは私「達」だけだ。私は、どうしても亜空間発生装置を完成させたいと思いで一杯だ。私は、率直に『行く』とクラウチに伝えた。

「怪我せずに帰って来い！ 分かったか！？」

クラウチは初めてこちらを心配するような言葉を残して通信を切った。やはり、形だけとはいえ多少はエミリアの保護者である自覚を持っていたようだ。

施設へ向かう道中で原生生物との戦いが会ったが、その時、ユートはカーシュ族の持つ力で、敵の気配を察知していた。

私だって、殺気感は、判る。幼い時から少しずつ取得してきたのだ。それは誇れる力ではあるが、ユートは自分の未熟さを理解していた。

すでに他界しているようだが、ユートにはには尊敬する兄がいたらしい。

「お兄はカーシュ族でいちばん勇敢だった。ぼくにとっても、それ

は誇りだ。ただ、お兄はいつも言っていた。『死にふれることで強くなれる』って。……その意味は、わからない」

「死にふれるって……なんつーか、レリクスよきのあんだみたいだね。厳密には違っけどさ」

「傭兵は、いつでも危険があるわ……。エミリア、でも……。それは違っわ」と言う。

多分……。ユートのお兄さんが言いたかった事は『死ぬな！生きて帰って来る事』だと思うから

「え……おまえ、死にふれたこと、あるのか!？」

ユートの表情が急に変わった。必死な表情で彼は死の意味やその先にあるものを聞き出そうとする。

「ユート……貴方、死んでしまってもいいとか、思っている？」

「……えっ!？」

どうやら凶星だったみたいね……。

「その話、忘れて……。私もあの時の事は覚えてないわ。ご免ね」と言いなおす。

それでも死に付いて聞き出そうとするユートだが、エミリアに仕事が終わってからゆっくり聞けが良いとなだめられる。

きつと……。いつかユートだって、わかるはず……。本当の人の強さを

急ぎ足でグラール教団の施設へと向かう。

施設の入り口は原生生物に侵入されたわりには、破壊された形跡がない。単純に、ここだけが無事だったのかもしれない。私の脳裏にまたノイズが、懸かる。

《危険！危険！原生生物大量発生！》

そのノイズの言うとおり、沢山の原生生物が、いる。私は、とりあえずユートとエミリアを安全な場所に隠れさせた。

「多過ぎよね？『これ』は、使いたくなかったけど」とにありと微笑み、上に手を上げる。

「SUVウェポン！エアライドクラスター！はあああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」と叫ぶ。

すると上からサーフィンボードみたいなボードが、現われる。飛び乗り、敵を撃退させていく。

原生生物はまだまだ大量にいた。

（くう……多過ぎるわ……SUVウェポンで倒しきるはずだったけど……でも、やるしかなさそうね）

そんな時、背後から誰かが走ってくる足音が聞こえてきた。エミリアかユートが指示を無視して戻ってきたのか。しかし、振り向いてみると、ガーディアンズの制服に身を包んだ、栗色の髪の少女だった。

少女はGRM製のロッドを振るって、ラ・フォイエを放つ。爆炎が数体の敵を吹き飛ばした。

（これは……ラ・フォイエ？！このこ……私より年下だけどやるわね）

私は、少女と協力して何とか超えられた。

敵が、いなくなったのを見て、エミリアとユートが戻ってきた。

「……ここは退避勧告が発令されています。速やかに施設外へ移動してください」

「私達は、任務の為にここに来ました。」と私は、答える。

「何だ、傭兵か」

こちらが傭兵だと知ると、彼女はあからさまに見下す表情になる。私は、少しイラッとした。でも、相手はあの《ガーディアンズ》だ。私は、その苛立ちをかみ殺した。

「むっ……！ あんたこそ、どこのどいつなのよ」

自制心がまだ弱いエミリアはガーディアンズの少女に食って掛かる。

「私は、ガーディアンズ総合調査部所属、ルミア・ウェーバー」

彼女はこの施設に閉じ込められてしまった者たちを助けるために来ていた。

（ウェーバーですって？！あのイーサン・ウェーバーの……）

ルミアがガーディアンズということもあってか、エミリアの彼女に対する敵意はより一層強くなる。やはり、なにかガーディアンズに恨みでもあるのだろうか。

「……もしもし、おっさん、聞こえてる？ あたしたち、任務変更するから！ この施設の奥に閉じ込められているヒトたちを助けに

行ってくる!」

エミリアはあろうことか、勝手にクラウドへ任務変更を伝える。当然クラウドは本来の依頼はどうするのかと言うが、彼女は実験装置を守りながら助けに行けば良いと言い返す。

「……………どういいうつもり?」

ルミアの言葉に鳩美は内心同意した。エミリアの行動は明らかに彼女に対する挑発だ。

「……………人助けとか、そういう重大なコトをガーディアnzのヤツなんかに、任せて入られないってことよ」

自分の実力を棚にあげて、エミリアはガーディアnzの能力を過小評価する。

「意味の分からないことを……………わかったわ、もっと貴方にも理解しやすく言っただげる。……………力のない人は去りなさい」

「ほーら、本性が出た! ガーディアnzはいつもそう! 上から目線よね!」

「そういえば、ウェーバーってどこかで聞いたことあるなっておもったけど、ようやく思い出したわ! あの英雄イーサン・ウェーバーでしょ。あんたはその関係者ってわけね!」

イーサン・ウェーバー。おそらくはグラールの多くのものが知っている名前だ。SEEDの巣窟であるHIVEに初めて生きて帰ってきた人間。その後も、「幻視の巫女」や「ガーディアnzのイー

ス」と共に、ダークファルスを討伐した英雄だ。

「ふん、どうせガーディアンズにいるのも、イーサンの七光りだったりするんでしょ？ そんなのに実力どころ言われたくないわ」

エミリアの言葉はもはや完全に言いがかりだ。

「兄さんは関係ない！」

先程まで冷静だったルミアだが、エミリアの言葉が逆鱗に触れてしまったようだ。

「ルミアさん！エミリアも・・・それは、いいすぎだわ」と私は、言う。

すると2人は、黙る。

「今は、助けるのが先だ！喧嘩は、任務を終えてからにしないで」と叫ぶ。

その後の退治は、大変だった。原生生物は、このプログラムシステムを壊そうとしてるのだ。

私達は、二手に別れて、何とか食い止めていた。

「……不気味ね。この辺りにはもう原生生物の気配が無いのに、どうして皆、脱出しようとしなの……？」

「……いやな風がふいてるぞ。この奥から、すごく強く……」

装置防衛の仕事は終わり、あとは救助者を助けるだけだ。しかし、ユートがなにかの気配を感じ取っているのか、要救助者がいると思わしき方向を睨みつける。

その時、壁を破壊して、双頭を持つ白い鱗の巨大な龍が現れる。

「ア、アルテラツゴウグ！ 教団所有の実験生物が、こんなところで暴れているなんて……最悪！」

私は、アルテラツゴウグと聞いて、思い出した。たしか・グラール教団がニューデイズの国防のために開発した生物兵器と聞いている。

「貴方たちまで戦う必要はありません。任務は達成したはずです、去りなさい」

「一人だけじゃ、無理よツ！」と私は、言う。

「私はガーディアンズです。目の前に助けを求めている人がいるのに、逃げたりすることなんて、できない」

「そう……さすが、ガーディアンズですね。でも……『死』と『生』の狭間よ？そんな信念でも、死んでしまったらバットエンドよ」

「無謀でもやらなければならいんです。私は……あの、英雄イーサンの妹なんだから、このぐらいやって、当然なんだから……！」

「あーもう！ めんどくさいヤツ」

憎いガーディアンズであっても、無謀な戦いに挑もうとする者を放ってはおけないのか、エミリアも戦う意思を示した。

私は、援護と攻撃のSUVウェポンで、サポートを行った。

攻撃と回復のローテーションを繰り返し、ついに倒せた。

戦いが終わり、エミリアはいつものように疲労で座り込む。

「貴方、名前は？」

「……エミリア、エミリア・パーシバル」

共に強大な敵に立ち向かったことで、ルミアとエミリアにある不和は、少し解消されたようだった。少なくとも、敵意のみをぶつけ合うような剣呑さなもうない

私達が、戻ると帰ってきたとたんに、エミリアは社長室へと呼び出された。

命令違反をしたのだから怒られる。エミリアはそう思っているようだ。しかし、彼女を出迎えたのは怒声ではなく、クラッカーの軽快な破裂音だ。

「え、な、なに？」

「エミリア、今日何の日か覚えてる？」と少し嫌味っぽく言う。

「エミリア、誕生日おめでとう……」と後ろに隠してあった花束を渡す。

チエルシーの企画したサプライズパーティーはこの上なく成功したようだ。その証拠に、エミリアはまるで白昼夢を見ているような表情をしている。

命令違反をしたと思っていたエミリアだが、クラウチは依頼を達成した上でガーディアンズに協力したのだから筋は通っていると、逆に彼女を褒めた。

さらに、ガーディアンズ総裁から直々の礼の言葉までも送られていた。エミリアを嫌っているように見えたルミアだったが、少なくとも彼女の働きを上司に報告する程度は理解しているようだ。

「ほら、こいつを受け取れ」

クラウチはエミリアに小箱を渡す。中身は羽を象ったイヤリングだ。しかし、渡された本人は、しばらくそれが誕生日プレゼントだとわからず、贈り主に言われてようやく理解する。

「……あ、おっさん！ その胸元にあるアクセサリー！ その、ネツクレスって……あれだよ。捨てたんじゃなかったの……」

クラウチの胸には確かにエミリアが買ったアクセサリーがあった。本人は誰も知らないようだから貰ったと言っているが、照れ隠しなのはバレバレだった。

エミリアはイヤリングを付けて大きく喜ぶ。それは大切な人から贈り物を受け取った時の喜びだ。口では悪くいいつつも、彼女に取ってクラウチは大切な存在であることを物語っていた。

そんな姿を見た、私は一人で窓辺に出た。エミリアの幸せを羨ましく感じた。自分は、元々親が、いなかった。それに私は……『キャスト』だけど……『キャスト』じゃない。赤い瞳で、優しくエミリアを見詰めていた。

5st:時を越えた邂逅(前書き)

今回、新キャラ登場

5st：時を越えた邂逅

「お久しぶり！ライアールちゃん」と女性は、言う。
確か、彼女は・・・私より前からここにいる・・・ビーストね。
実は、海底レリクスにも遭遇したわね・・・

「あの・・・あの時の？」と私は、言う
女性は、少し驚いたけど、すぐ顔を微笑ませ

「ご免ね！あの時、紹介するべきだったわね？私は、ミルフェーヌ・グランチェスよ。種族は、見ての通りのビーストよ。」と言う。
それにしても、紅茶みたいな名前だなと思う。

「ミルフェーヌって、紅茶みたいな名前よね？」

「ああ・・・父さんが、大の紅茶好きでね。娘の名前にも紅茶の名前にしたんですって」とケラケラと言う。

「それよりも、もしかして任務？」

「ええ、モトウブに行くつもりよ。」と言う。

「へえ・・・そうですか。頑張ってくださいね」と微笑む。

「ええ・・・行ってくるわね」とミルフェーヌは、言い去る。

そして、翌朝。出勤時間が近くなると、エミリアが私の部屋に来ていた。

「うーっす、おはよー！今日も一日がんばっていきーね！」

「エミリア、嬉しそうね。」と私は、言う。

多分、彼女の人生の中で一番嬉しかっただろうな・・・

「そういえば……どうしてミカは、あたしたちに協力してくれるの？」

「私にとって、貴方たちは息子でもあり、娘でもあり、孫でもあり……なにより、家族であるからですよ」

ミカはヒューマンは自分を器に造られたのだと言う。恐らくクローニングの一種で、ミカの遺伝子をもとに造られた人工人類がヒューマンなのだろう。

「おい！ 二人ともー！ ……ミカのおいもするな？ じゃあ、三人ともー！」

今度はユートが入ってくる。話題が彼がいった「ミカのおい」にうつる

ミカ本人によると、それは旧文明時代にあった「ティの花」の香りだと言う。彼女が好きな花らしい。

「あつ、ユート私達に用が、あつて来たじゃないの？」

「ああそうなんだ！ミルフェーヌって言うビーストが、傷だらけで帰ってきたんだ」とユートは、言う。

モトウブで何かあったのだろうか？

私達

が、事務局に向かうとミルフェーヌが、クラウチと話していた。

「あつ、ライアルちゃん。」とにこやかに言う。

「何か、あったの？」

「うん・・・それよりニュースを見て」

報じられている内容は、各地で謎の失踪事件が発生しており、発見された失踪者はみな失踪時の記憶を失っていると言う。

「この前、ウチに侵入してきた襲撃者たちがいただろ？ あいつらも失踪者だった。襲撃時の記憶が無い点もまったく同じだ」

「つまり、カーシュ族の村を襲撃した事件と同じと言うことですね」

あの黒服の男が他人を操り何かを企んでいる。証拠は何もないが、その可能性は高い。

「ええ・・・それもあるかもしれませんが。私達、4人で任務を遂行していたんですが、3人が、失踪してしまって・・・私は、何とか助かりましたが・・・」とミルフェーヌが、言う。

「元ガーディアンズのお前だけでも、助かってよかった。失踪者は、犯罪に従事させられる可能性がある。今回は、ミルフェーヌ、お前が彼らを案内してくれ」

「判りました。場所は、モトウブの雪山です。」

私達は、モトウブの雪山に来ていた。

「うー、寒っ！ よりにもよって、こんなところで失踪しないでほしいんだけどーっ！」

雪山の容赦ない寒気に、エミリアは体を震わせている。

その時、誰かが近寄ってきた。

「……こんな雪山の中で騒いでいるから誰かと思えば、あなたたち

だったのね」

その誰かはルミアだった。奇縁か、はたまた腐れ縁か。またしても彼女と出会う。そして、エミリアはまたしても彼女に対して、以前ほどではないが敵意を見せる。

「行く、3人とも。こんなやつに構ってるより、失踪した社員を早く探さない」と

「……『失踪』ですって？」

「ええ・・私が、もつと気をつけてれば、よかったですか・・」とミルフェー又は、言う。

「ミルフェー又さん・・！？リトルウィングに変わったのですか？」とルミアは、言う。

「あれ？前に言わなかった・・上からの命令無視で《HIVE》に進入したから、その理由でガーディアンズを止めたって」とニコツと微笑んだ。

ルミアはエミリアから失踪という言葉聞いて、様子がおかしくなっていた。いきなり、ここは危険だから同行すると言ってきた。

「ユート、どうした？」

これから向かう先を、ユートは嫌な予感がすると言って睨んでいる。前の件もあるし、ここはユートの感を信じるしかない。

「これ、三年前のと同じ……？ ううん、ちょっと違う……なんだこれ……？」

一行は失踪者を探すため、雪山を進む。その道中で、ユートの感じた気配の主が現れた。

およそまともな生命とは思えない姿。まるで、悪夢に現れるような恐怖が形を持ったかのようなそれは、三年前にグラールを襲ったSEEDだった。

「ちょっと、SEEDフォームが出てくるなんて聞いてないわよ！
どうなってるのか説明しなさいよ」

「私に聞かれてもわかりません！ でも、たしかにSEEDは三年前に封印されたはずなのに」

エミリアは適当な封印をしたと、ガーディアンズを罵る。しかし、生き残りのSEEDがいたと言うのなら、なぜ三年前から今まで発見されなかったのか。

「エミリアちゃんだっけ？ガーディアンズを嫌疑するのは、いいけど・・・確かにSEEDは封印されたわ。でも・・・これは、《人の記憶》だと思うのよ」とミルフェー又は、言う。

「記憶？」

「ええ、これは記憶から生まれたものだと思うの。だって、この風景、私は知ってるから」と真剣に言う。

彼女の言葉に間違いが、ないだろう。

「ちょっと待って」

エミリアが制止の声をあげる

「その壁なんだけど……なんかおかしくない？」

エミリアは何の変哲もない岩肌を指さす。

「あ、やっぱり！ この壁、うまくカムフラージュしてるけど、投影されたホログラフだ！」

エミリアが岩肌に腕を入れて、それがまがい物であることを証明する。

「色彩パターンのズレが妙に論理的じゃん。ま、これだけ情報密度が高いホログラフだと、電波の途絶が起きてもおかしくないけど……となると、失踪者はこの奥かな？」

エミリアはホログラフの岩肌を見ながら、ぶつぶつとなにか呟く。

「急に人が変わったように……あの子、一体なんですか？」

「私にも、わからないけど……彼女は、凄いわ。」

ミルフェーヌも気付いたのか、なるほどと呟く。

ビーストの獣の本能が、察したのだろうか？

確かにエミリアの分析眼は凄まじいものだ。彼女の人格と大きなギャプのある力だが、生まれ持った才能であろうと、なにか理由があって獲得した能力であろうと、知ったことではなかった。多少興味があるのは確かだが、重要なのはエミリアが傭兵として働く上で、それが役に立つかどうかだ。

私達はホログラフで隠された道を進む。初めはただの洞窟だったが、次第に人工物が増えていった。何者かが作った施設であるのは間違いない

その時、またしてもエミリアの分析眼が力を発揮した。施設内にあるフォトン供給のロジックパターンがインヘルト社の構造と同じだと言う。

ここはインヘルト社が関わっているのだろうか。しかし、私がそれを断定するにはまだ判断材料が少ない。

さらに先へと進む私達だったが、彼女たちの前にマシンリーが立ちはだかる。ローグスがよく使う機種だが、荒くれ者が使っているのとは比べものにならないほど、丁寧に整備されている。

現れたマシンリーを全滅させ、私達は周囲の安全を確認した後に、装備を再チェックする。

「それにしても・・・あんた凄い」とミルフェーヌに言う。

「そう？エミリアちゃんも、頑張って修行すれば私のように強くなるよ」と言う。

「貴方って、本当にポジティブですね・・・」と私は、言う。

「うふふ・・・昔は、そうじゃなかったわ」

「えっ？」

「じゃ、行きましようか？余程・・・見られたくないものが、ある

みたいですよ」

「そのようね……調査班の反応も全部ここで途切れているし……やはり、この奥に失踪のヒミツがあるかというの……」

「調査班の反応が途切れた……やはりガーディアンズの方も失踪されているようですね」

「う……」

「そっか。……リトルウイングとかだけじゃなくて、ガーディアンズでも失踪者出ているんだ。ま、調査しているヒトが行方不明になるとか、ちよっと大声では言いにくいよねえ！」

エミリアはありったけの嫌味を込めて言う

「エミリア、失礼よ！」

私は、エミリアとルミアの口げんかを止める。

「はあ……やれやれ」

「ライアール、疲れてるのか？」

「大丈夫よ」

私は、エミリアはまだまだ子供なんだなと改めて思い知らされたのだった。

さらに先へと進むと、洞窟へと出た。

「おーい！グラールネル！クリーフ！ヘレナ！」とミルフェー又は、叫ぶ。

しかしどういう事が、声をかけてもこちらに気がつかない。

「けえッ！何故SEEDが!？」

「グラールネル、落ち着けッ！くう・・・ミルフェー又とも別れたが、あいつは、無事だろうか？」

「クリーフ！彼女は、無事だと思います！今は、敵を倒しましょう」

ようやく私達の存在に気付く。だが、敵意を向けていた。

グラールネルは、アックス クリーフは、ライフル ヘレナは、ダブルセイバーを持つ

「私達は、敵では、ないわ！」とミルフェー又は叫び、シールドで防御した。

理由は、判らないけど・・・私達をSEEDと勘違いしてるらしい。

「仕方はないみたいね。スタンモードにして戦いましょう」と言い私は、ライフルを持つ。

元々、キャストはボウガンタイプだ。キャスト特有の特技だ。

「ええ・・・」と言いアックスを出す。

さすが、ビーストだ。攻撃力が、高い能力をいかした戦いだ。

「ハアアー！」と叫び、撃つ。

上手い事に武器を投げ出す。

「はぁッ!？つて・・・ミルフェーヌ!」

「うう・・・良かった。無事で」

「それより・・・何でミルフェーヌさん、武器を持ってるのですか？」

「ああ・・・原生物を退治してたのよ」

「とりあえず・・・3人は、戻ってくれない?ここにまだ失踪者がいるみたいだから」とミルフェーヌは、言う。

3人は、頷き飛行船に乗っていった。

その時、遠くから人の声が聞こえた。急いで向かってみると、数名のガーディアンズがいた。

「いったい、あの方たちは何を見ているのでしょうか?」

ガーディアンズは何もない場所を怯えた様子で見っていた。あの人達もSEEDの幻を見てるのだろうか?

SEED・アーガインをはじめとして、SEED・キャリガインなどの大型SEEDが現れた。

「ありゃありゃ・・・これは、本物ね」とミルフェーヌは、言う。

「でわ・・・本物?」

「じゃ、私も本気を出しましょうか？ ヴィヴィアン……力を貸して」と言つと弓を出す。

「多過ぎるわね……」と呟き・ライフルを打ち出す。攻撃・攻撃を繰り返していく。

なんとか・全部倒せた。

「ぜえ……ぜえ……これ以上はさすがにカンベンして……」

大きな戦いが終わると、その場にエミリアがへたりこむのは、もはや恒例行事となってきた。

SEEDがふたたび現れるような気配はない。しかし、ユートは緊張を解かずに、洞窟の出口を睨みつけている。

「……感じる、まちがない！ あつちに、大地神さまがいる！」

「2人供、ユート君を追いかけて！ 失踪者は、私とルミアでやるから」とミルフエーヌは、言う。

私とエミリアは、ユートを追う。

洞窟の外ではユートがああ黒服の男と戦っていた。

「……ふん、また貴様たちか。どうあつても、私の邪魔をしたらしいな」

「カーシュ族の村に始まり、クラッド6の襲撃も、そして今回の騒動もどうやら貴方が犯人のようですね」

「愚問だな。答える時間すら惜しいほどに」

男の傲慢な表情は、初めて見た時とまるで変わらなかった。

「大地神さま、かえせ！ それは、ユートたちの大地神さまだ！」

「大地神？ レッドタブレットのことか？ 何をバカなことを言っている。これはもともと、我々のものだ。『消え行く存在』ごときがこれを持つなど……おこがましいにも程がある」

「その物言い……やはりあなたも旧文明の残滓なのですね」

ミカがエミリアの体から現れる

「フン……出てきたな。愚かな裏切り者め」

「私たちの文明は終焉したのです。今この時代、この世界があるのは、ここに生きる人々の努力の結晶だれも、それを奪う権利はありません」

ミカの言葉に対して、男は侮蔑の感情を込めて笑った。

「この時代に築かれし平和は、旧文明の遺産によってもたらされたものではないか！ 我らこそ万物の創造主。必要なら奪い、不要なら捨てるまで」

確かに今の文明は旧文明の遺産を使ってSEEDを封印した。しかし、A・フォトンを使わずに封印すると言っ、旧文明に出来なかったことをやってのけた。

それに、私達は、『今』のグラールを復興させたのだ。古代人が、

すべて放り出したのに、この態度は気に食わなかった。

「旧文明の栄華が戻るそのときに、すべては消え往く運命にある！
この身体に宿る、意識のようにな！」

「ならば私は……力づくでも貴方を止める！」

「面白い……旧文明の支配者たるこの私には向かうつもりか？ お
前の宿主も、周囲の者どももボロボロではないか？」

悔しいが、私達は先程のSEEDとの戦いでかなり体力を消耗し
てしまった。

「よく、考えるのだな。旧文明の復活こそ……このグラールが選ぶ
べき道なのだ！」

そう言い残して、男は雪山の銀世界の中へと消えて行った。

その後、クラッド6へと帰還し、クラウチに今回の一件を報告す
る。

エミリアは失踪事件の首謀者である黒服の男はインヘルト社とな
にか関係あると言った。

「……大企業を疑うってというのはそのまま、敵にまわすって意味だ
ぞ。わかって、言ってたんだな？」

「……うん。あたしは、間違っていない」

「ハア……なんつーか、申し合わせたようなタイミングになったな。

……ウルスラ、言つちまっつていいか？」

「ええ、構わないわ。決定事項だからね」

鳩美達はウルスラから、リトルウィングの親会社であるスカイクラッド社が亜空間開発のスポンサーから降りることを聞かされる。他の企業も次々とスポンサーから降りているという。

それは亜空間の発生が原生生物の凶暴化の原因になっているためだった。

さらに、亜空間が生み出された際に、「周囲にいるヒトの思考が具現化」するという現象も確認されていた。

私は、この事件でなんとか判った。具現化現象の原因は、『シズル』の体に取り付いた哀れな『旧文明人』である事……。多分……。インヘルト社が、一番怪しい。

私は、それを伝える。でも……。『シズル』の事だけは、黙っていた。

「たしかに、封印されちまった今となつては、その具現化現象を疑うのが可能性としては一番だろうな」

「形を残さず消失するという特徴も、具現化現象の報告にある通りだし、間違いないわね」

「その黒服のヤツが主犯格だろうから、捕まえられれば一気に解決しそつだが、まだインヘルト社とつながっている証拠は薄い。まずはその辺を探つていかねえとな」

新たな事件が起こったことで、ようやくクラウチが動き出した。これは大きな成果だ。

「おっさん……あたしの言うこと信じてくれるの？ 証拠もないのに……」

以前は必死に言っても信じてくれなかった。しかし、クラウチからはエミリアに対する確かな信頼が感じられる。

「おっさんも、ちゃんとあたしのお話を聞いてくれたんだ……」

リトルウィングの事務所を出て、エミリアはクラウチが自分を信じてくれたことに笑顔を見せる。

「なんだろう、この気持ち……よくわかんないけど……すごく、心地よいものだね」

あの誕生日からエミリアの心にとってプラスに働く出来事が続いている。

それから、エミリアと別れて自室に戻った。ベッドに腰をおろして物思いふける。

脳裏に再びあの傲慢な表情が浮かんできた。

「旧文明人か……でも、インヘルト社の研究は……世界を平和するためのなのね」と呟く。

「あの旧文明人から……シズルを助けたい……」ときつく

手を握ったのだった。

6st：夢の終り

リトルウィングの人達の協力のお陰で情報を得られてきた。

クラウチが調査を開始してから数日後、インヘルト社は緊急記者会見を開いた。大方、新しいスポンサーの募集だろうと、私はエミリア達と黙ってみていた。

画面にナツメ代表が映し出される。いささかつかれて見えるのは歳のせいではないだろう。そして、そんな彼を支えるかのように、息子が傍らに立っていた。

ナツメ代表の息子、シズル・シュウの姿を見てエミリアが大声を上げる。

私は、黙ってシズルを見詰めた・・・やはり、シズルだったのだ。

クラウチは念を入れて確認する。エミリアだけでなく私とユートも頷いた。

「調査方針の変更つても、ちょうどいいっちゃちょうどいい。共同捜査に切り替わるタイミングだしな」

「共同捜査ですか」

どうやらリトルウィングとは別の組織も、今回の騒動の調査をしてくれるようだった。クラウチに協力相手がどこなのか訪ねる。

「失踪事件に関する調査を、ガーディアンズとリトルウィング協同行うことになったのよ」

答えたのはクラウチではなく、聞き覚えのある少女の声だった。

振り返ってみると、ルミアがそこにいた。

ルミアは橋渡しし役としてやってきた。彼女とエミリアと口論は不愉快であるものの、警察権を所有しているガーディアンズの力を利用出来るのならば安い代償だ。

私は、とりあえずルミアをクラッド6内を案内する事をクラウチに伝えられた。

ルミアはそんなことよりも、早く捜査を開始しようと言うが、クラウチはまだ一人で十分だと言った。

自分は不要だと言われたルミアは不満げな表情を浮かべるが、彼女に仕事はほかにもあった。

それは戦闘用VRプログラムの試験運用だった。

VR……つまりホログラムなどを利用した仮想空間はクラッド6でもレジャー用のが使われていた。

早速、ルミアと共にその訓練装置を受けることになった。

「あ、ちょっと待ってもらえる？」

ウルスラさんに止められた。とりあえず3人に待ってもらうことにした。

「はい、なんでしょうが、ウルスラさん？」

「最近、クラウチが真面目に仕事をするようになってきているのは、あなたのおかげだったりする？」

「いえいえ、とんでもありません」

「そうかしら？ あなたが来てからクラウチもエミリアも、いい方

向に変わってきてるのは間違いないわ」

「クラウチが調査を申し出たりするなんて、まるで昔のアイツを見てみたい」

ウルスラは昔を思い出すような目をする。

「あ、ごめんなさい。あなたにはわからない話ね、これは」
ウルスラさん、こんな顔をするとは……

「あなたのお陰で、リトルウィング全体がいい方向に変わってきてるわ。あなたは今のリトルウィングにとって、なくてはならない存在なのかもね」

「いえいえ、私にはそんな大仰な影響力はありません」

「……話はそれだけ。さ、エミリアを追いかけてあげなさい」

私は、早足で向かった。

「ごめんなさいね。」と誤り、

はさっそくVRプログラムを受ける。

生み出された仮想世界は何処かの森だった。精密に描写されて本物のように見えるが、ユートは現実とは異なる感覚に戸惑っている様子だった。

私は、フリーの頃から何度も受けてたから、大丈夫だったが、初めは私もユートと同じ状態だった。

風はなく、森の匂いもしない。ハリボテの世界だ。

敵が現れる。もちろん戦っても手応えは薄い。前に雪山で戦ったSEEDと同じだ。

「ライアール、こんなのおかしいぞ！ 敵を倒しても、何も感じないし、痛みも、こわさも、ぜんぶウソだ！」

訓練をはじめてからしばらく、我慢でくなつたユートは不満を上げる。

「ユート、これはあくまで『データ』の世界よ。それを理解して、私達は、やってるのよ？」

「もつと傷ついて……もつとつらい戦いをしないと……」

「確かにユートの言うとおりだけど……ここに現われる原生物の弱点を見つげるためよ。いざというときに命を落とさないために。実戦を経験しなければ本当の実力が見につかないのは事実ではある。しかし未知の敵と戦うことは、何もで出来ぬまま死ぬ可能性がある。敵の行動を学ぶという点ではVRは十分価値のある訓練だ。ユートの考える修行は博打でしかない。」

「ま、もう少し進めば、また違つかもよ？ 巨大な原生物も再現しているって話だし」

「ほんとか？ なら、はやくすすもう！ のんびりしていても強くなれないし、なによりここは、気持ちがいい」

「ちょ……ユート」

ユートは一人で先に走り出してしまう。しよせん仮想空間とはいえ、浮き足立った心でまともな訓練などできるはずもない。

「放っておいても問題ありませんよ。死んでも大丈夫なんですし」

「ルミア・・・確かにこれはバーチャルだけど・・・本気にやらないと実践にならないわ。それにそつたやすく『死ぬ』を言わないで下さい」

「.....あ、わ、私.....」

訓練を続ける。とはいっても、似たような風景が続くだけだ。

「しかし、この空間って、何を再現したものなの？」

エミリアがルミアを訪ねる。確かにこの風景は見たことない。でも、何故か知っている。頭のコンピュータが、『リュクロス』とだけ伝えてくる。まるで、「グラールではない全く異なる惑星」にいるような錯覚すら陥る。

「.....リュクロスの内部から検出したプログラムを解析、再現したら、こういう仮想空間ができた、って話よ。誰かの『思い出し』の再現とも言われてるけど、その詳細はまだ調査中で、安全性についてもこうして実験中」

リュクロスは最後の封印装置が隠された、最大級の旧文明の遺産だ。もしかしたら、この森は旧文明時代にあつたものなのかもしれないが、私は頭だけ知ってる世界でしか、思えない。

「.....リュクロス.....か」

リュクロスの話題を聞いて、エミリアの表情に影がさす。何か嫌

な思い出もあるように見えるが、リュクロスを訪れたのはゲーディ
アンスや同盟軍などの人間だ。彼女のような少女がリュクロスと関
わっているようには思えない。

その時、またしてもユートが一人で勝手に先行する。私は、呆れ
ながらもユートを追うのだった。

森エリアをクリアすると、次のステージは洞窟エリアだった。

「……場所がかわった？ でも、ここもさつきと同じだ。気配とか、
すべてがうすくて、弱い感じ」

ドロリとした溶岩の川が、暗闇の世界であるはずの洞窟を赤く照
らす。いるだけで肌が焼け付きそうな風景だが、空気がまったく変
わらないのは先程の森と同じだ。

「とはいえ、でっかいやつとか、ヤバいやつとか出てきそうな雰囲気
気だね……だからユート、いい加減、一人でつぶしるの禁止！」

「……こんな気配のうすい場所じゃ、あれぐらいしないと修行にな
らない！ 感覚がにぶっていくぐらいだよ！ ぼくは、もっとつよ
くならないといけないのに……！」

エミリアが姉のように諭しても、ユートは不満を見せることをや
めようとはしない。

「ユート。エリアは、移動してるわよ？ 強い相手も出るから、機嫌
直しなさい」と私は、言う。

「私も同意見ですね。こんな無駄な訓練をしている暇があったら、

「私たちも調査に回るべきです」

ルミアもか・・・確かに本来はルミアは手伝いに来ていたのだ。だが、その様子だと何か天罰が、起きそうだ。

「あー、もう！ ユートと話してたらルミアに飛び火とか、すっげーめんどくさいんだけど！」

「あら、あなたはガーディアンズが嫌いなんですよ？ どうなつてようが、関係ないじゃない」

「ガーディアンズは関係ない！ あたしは今、あんたに話してるの！」

エミリアがルミアに詰め寄った。

「確かにあたしはガーディアンズがキライ……でも、あんたのがんばってる姿はキライになれなかった。あたしも、あんなふうになれたらとか思ったりしたのに……何よ、今のアンタの姿は！」

エミリアの怒りは、嫌悪感ではなく、認めた相手だからこそその怒りだった。

「ほら、ライアルも何か言ってやってよ！」

強く叱りつけるタイミングを逃してしまった。仕方が無いので、微笑みながらルミアを諭すことにした。

「確かにこの試験運用は貴女の望む仕事じゃない。だけど、先程からの態度は、いささか目にあまるわ。それに・・・貴方は、《英雄の

妹』じゃなくて、ルミアでしょ？」

「……すみません」

ルミアにとっては十分反省につながったようだ。

「なんでも一人でやらなくちゃ、全部自分でやらなくちゃ……って、焦ってたんだな、私……」

人間は、他人に全てにおいて完璧であることを望む。恐らく、ルミアは英雄の妹として、周囲から本来の実力以上の結果を期待されてしまったのだろう。

「『あんに話してる』か……そんなこと言われたのはじめてかもしれない……ありがとう、エミリア」

ルミアは小さく笑う。英雄の妹ではなく、個人としてエミリアは怒った。それは、むしろ喜ばしいことなのかもしれないという笑みだ。

「……ありがとう、って……わ、わかればいいのよ！ わかればね」

まさか礼を言われるとは思っても見なかったエミリアは戸惑ってしまう。

「……ぼくには、よくわからない。強くなりたから前にすすむ、それはなにもまちがっていないのに……！」

ユートはまだ理解していない。人間は常に前へ進むことを生まれ

ながらに義務付けられているが、だからと言って前のみを見ることは許されない。人は前に進みつつ、全ての方向に視線を向けるべきである。それこそが、多くの人間が信奉している社会の真理だ。

ユートは走り出す。その背中には彼が焦っていることを物語っていた。

仮想空間の洞窟エリアで訓練を続けて行くうちに、広々とした場所に出た。どうやらボスステージらしい。

現れたのはドラゴンだ。巨大な飛膜と長い尻尾に、銃弾すらも受け止めそうな鱗。グラールではよく見かけるタイプの原生生物ではあるが、目の前の竜は見たこともない個体だった。

「ようやくきたな、強そうなヤツ！ こいつを倒して、ぼくは強くなるんだ！」

強敵の出現にユートは喜びの表情を見せる。危険な兆候だ。もしも彼がこのままならば、実戦で致命的な危険を呼び起こしてしまう。私は、ドラゴンを観察した。大体のモンスターは、初見だとよくことうする。

しかし、ユートは雄叫びをあげながら猪突猛進にドラゴンへと挑んでいった。

「ユート、危ないッ！」とスナイパーを取り出し、尻尾に攻撃した。

「じゃましないでくれ！」

「ユートッ！」と叫んだ。

「あんな攻撃くらつてもぼくはたおれない！」

完全に頭に血がのぼったユートはドラゴンに立ち向かう。

ドラゴンが口を開く。喉の奥から小さな炎が見えた。危険な攻撃の兆候をユートは気がついていない。

そしてドラゴンが火球を口から撃つ。ユートへの直撃コースだが、エミリアがとっさにフォイエをはなつて相殺した。

「くう・・・」とダブルセイバーに持ち替えた。

ドラゴンが降下した瞬間にセイバーを振るった。

ユートは飛び上がり、スピアをドラゴンの脳天に突き刺す。そこを攻撃されて生きていられる生物など存在しない。見たこともない竜は悲鳴も上げずに絶命し、そして幻のように消えた。

「もつと強いやつ、こないのか！ ぼくはまだまだ戦えるぞ！」

「ユートッ！」と彼の頬にビンタした。

ユートは、啞然としている。

「痛っ！ な、なんで殴る！？」

「ユートいや・・・馬鹿な子供。あんた・・・私とエミリアの援護なきや、本当に死んでたわよ？」

「で。でも、タイヘンじゃないと、修行にならないから……」

「強くなりたいのは、判る。でも、死んだら意味がなくなるわ」

「で、でも……」

「……で？」

「あの黒服のヤツ、すごく強かった。もっと強くならないと、勝てないから……だからもっと、修行しないと……」

「一人で頑張ってもいけないわ」

「え？」

「私達が、いるわ。シズル……いえ黒服の男を倒すには、仲間と力を逢わせればいい……。一人では、倒せなくても……エミリアや……ルミアそして私と力が合わされば……物凄い力になる。」

「……と、とりあえずユート、あんたはもっと仲間を頼るクセをつけること！ 今回みたいなことをしたら、もう二度とプリンおごつてあげないから！」

「え、ええっ！ ……それは、いやだ」

好物のプリンを人質にされたのも効果があったのだろう。ユートは素直に自分の間違いを認めた。

エミリアはユートの素直さを褒めた。jそして、訓練を終えたらプリンを食べにカフェへ行こうといった。しおれた花のように落ち込んでいたユートだったが、プリンの一言に元気を取り戻す。

訓練を終え、カフェへ直行しようとしたが、ウルスラに呼ばれた。エミリアとユートを先に向かわせて、ルミアと共にウルスラさんのところに行った。

「おう、来たか。悪いな、訓練の直後に呼び出しちゃってよ」

すでにクラウチは調査から戻っていた。執務机には資料と思しき書類が置かれている。彼は単刀直入に調査結果を話してくれた。

「まず、シズル・シユウはクロだ」

シズルが姿をくrams タイミングと失踪者事件のタイミングが一致すると言う。

「だが、まあ、それはどうでもいい……問題は……失踪者を統率してシズルが何をしているのか、だ」

それこそが最大の問題。封印計画の実現が目的なのは当たり前だが、その為になぜ失踪者を操っているかを知る必要がある。

「辿った道筋や目撃証言を統合すると、ひとつは旧文明遺産の強奪だ」

シズルはカーシュ族の村からレッドタブレットを奪った。クラウチが調べたところによると、それと同型の情報端子を集めているらしい。

「それで、もうひとつは？」と私は、言う。

「ライアール、以前ウチが襲撃されていることは覚えているな」

「ええ・・・」

「だが、ここには旧文明ゆかりのものなんて、これっぽっちもいいちやいねえからな。その理由だけが、ぽっかり浮いていた」

「……不正な手段による、個人情報アクセスなどの記録が決め手になった。間違いねえ。……ヤツの狙いは、エミリアだ」

「それで、どうするつもり？ あの子を餌にしてシズルをおびきよせるとでも？」

「そんなリスクの高いマネはできねえよ。だが、今までどおりってワケにはいかねえ。だから……今後、エミリアは仕事から外す」

「それが最良だ」と付け加えるようにいったクラウチの表情は苦しい。せつかくエミリアが成長してきたというのに、それを振り出しに戻すような事は、できればしたくないという顔だ。

「あたしを『はずす』って……なに？ どういうこと？」

クラウチにとって最悪のタイミングだった。後ろから聞こえてきた声に、私は振り向くと啞然として絶望したような表情のエミリアが、いたからだ。

「あ、ああ、『外す』って、そういうことか。あたし、みんなと一緒に仕事か……はは……仲間とか、なんとか言ってる……あたし、バカみたいだね……」

「あたしは……やっぱり、ひとりぼっちなんだ……」

夢が終わって、冷たい現実に放り込まれたと思い込んでしまった
エミリアは、クラウチの声を聞かずに飛び出して行った。

そして、彼女はリトルウィングから何処かへと出て行ってしまっ
た。

私は、心の奥でエミリアと叫んだのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9218u/>

～ グラールの危機 ～

2011年11月20日19時30分発行